

連携室だより

鹿児島医セン

鹿児島医療センター(心臓病・脳卒中・がん専門施設)

2018.2

vol. 142

平成29年度

循環器病看護エキスパートナース研修を開催いたしました



平成29年10月23日～12月1日まで平成29年度循環器病看護エキスパートナース研修が開催されました。国立病院機構九州グループ主催の研修は今回を含め16回目となります。

当院は、循環器医療の中核を担う施設で、地域のニーズに対応できるよう、日々医療・看護の質向上に取り組んでおり、今回は、九州各県から15名が受講しました。

特に今年度は、当院で実施しているTAVI（経カテーテル的大動脈弁置換術）やリードレスペースメーカー植え込み術等の治療、看護の実際をカリキュラムに加え、最新治療の看護を学ぶ内容を企画しました。研修生も循環器看護実践能力の向上、他職種との連携、患者・家族との関わり、教育指導体制など各施設の課題解決と共に自身のキャリアアップという目的意識を持って参加しており、講義・見学・実習を通して学びが深められるよう担当者で支援できる体制を整えていきました。

研修が始まり、循環器診療・看護について、院内の錚々たる講師陣による密度の濃い講義に熱心に耳を傾けていました。また、特別講演として「救急・重症患者と家族のための心のケア」をテーマに患者のみならず、家族への関わりについても学ぶことができたのではないかと思います。更に当院の集中治療認定看護師から専門性の高い講義や各病棟指導者と共にフィジカルアセスメントを活用した病棟実習を経験し、自施設とは違った看護の提供について考える機会となったようです。

また、25日夜の懇親会には、多くの参加者が出席し、院長はじめ看護部長や各部署の職員と顔を合わせ、郷土料理を囲んで賑やかに話が弾みました。研修から数日でお互いの緊張もいい感じにほぐれ、更に鹿児島島の街のよさを知っていただくよい機会となったのではないのでしょうか。

研修生の皆さんは各施設で循環器看護に携わりながら、スタッフ教育や実践に対する悩みを抱え、その解決方法の糸口をこの研修に求めてこられます。各施設の特徴はそれぞれですが悩みや不安は共通するものが多く、グループワークを通じた意見交換によって施設に持ち帰る情報やヒントを得ることができていたようです。この研修への参加がネットワークづくりや情報発信のきっかけになれば幸いです。

研修開催に当たりご尽力いただいた講師の先生方をはじめ、院内職員の皆様に感謝申し上げます。

(文責：東7階病棟 看護師長 松本 深雪)





第10回 緩和ケア研修会



平成30年1月7日(日)、8日(月)の2日間、鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校において、第10回目の緩和ケア研修会を開催しました。

受講生は、研修医2年目から臨床経験30年の医師27名、多職種(看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー)9名が参加しました。

例年、講師・協力者としてお世話になっておりますKKR札幌医療センター緩和ケア科の瀧川千鶴子先生をはじめ、県内より5名の医師、3名の看護師の皆さま、患者会よりNPO法人がんサポートかごしま理事長の三好綾さん、副理事長の野田真記子さん、事務局の牧元洋子さん、当院の各部署からも多くの協力を頂き、円滑に進行することができました。

研修会では、緩和ケアに関する講義、事例検討、ロールプレイに加え、三好さんより『緩和ケアに患者・家族が望むこと』というテーマで、ご自身のがんの体験を通しての思いや医療者に伝えたいこと、緩和ケアに望むこと、患者会での活動、旅立った仲間からのメッセージ等、講演して頂きました。三好さんのお話し(患者さんの声)をきき、研修生はもちろん、協力者も多くの気づきや学びとなりました。

今回の研修会で学んだ基本的な緩和ケアを、臨床の場で実践して頂ければ幸いです。

(文責：緩和ケアチーム 水流 尚子)

“緩和ケア”これまで私にとってこの言葉は、“敗者の医療”というイメージで、自身の中から遠ざけていました。しかし、今回緩和ケア研修会に参加して、Cure(治す)だけでなく、Care(ケア)も大事な医療の一つであると改めて認識すると共に、医師にとって最も大事な“患者さんに寄り添う”という原点がこの“緩和ケア”に中にあることを実感しました。

私は本職に赴任するまでは、鹿児島大学病院の臨床研修センターで研修医の教育・指導に携わっていました。その中で、研修医が達成すべき臨床研修の到達目標の中に、「患者-医師関係：患者、家族のニーズを身体・心理・社会的側面から把握できる」、「チーム医療：保健・医療・福祉の幅広い職種からなるメンバーと協調できる」という目標が掲げられています。今回の研修会は、これらの目標を学ぶ場として最適な研修会であり、患者代表の三好理事長をはじめとする「がんサポートかごしま」の皆様や、看護師さんや社会福祉士さんなど多職種の皆様と、ロールプレイなどを通して広く意見交換や交流ができたことが、とても印象深くに残っています。今回多数の研修医の先生が参加していましたが、これからの医療を担う研修医にとっても大変有意義な会であったと確信しています。そして私自身も無意識に実践していた Care を体系的に多角的に学ぶ大変貴重な経験であったと思います。

最後に、今回の会の開催にあたりご足労頂いたスタッフの皆様には厚く御礼申し上げますと共に、皆様のご尽力を無駄にせぬよう「良質な医療」を提供できるよう精進していきたく思います。

(文責：消化器内科医長 瀬戸山 仁)



1月7日、8日に行われたがん緩和ケア研修会に参加させていただきました。緩和ケアの総論から疼痛や呼吸苦、悪心等の症状のコントロール、精神的ケア等の各論に及び、大変充実した2日間となりました。その中で患者会の三好さんのお話で患者さんの願いや思いを聴いたり、終末期の患者さんが在宅で十分なケアを受けるために多職種グループで話し合ったりしていく中で、病気を治療するだけでなく、患者さん一人一人に合わせたケアの重要性を改めて考えさせられました。どうしても日常の診療の中で多くの患者さんを診ていると、医療者側からの視点に偏りがちになってしまうように思います。もちろん患者さんにあった適切な治療を提案していく知識や経験も重要ですが、傾聴の姿勢や相手への気遣いなど人と人とのコミュニケーションを大切にして信頼関係を築いていきたいです。

今回の研修会は緩和ケアのことだけでなく、自分の医療に携わるにあたっての姿勢を考え直すいい機会になりました。今回学んだことを忘れず、患者さんに寄り添った医療を提供できるように努力していきたいと思います。このような機会を与えて頂きありがとうございました。

(文責：臨床研修医 木山 優)

今回初めて緩和ケア研修会に参加させていただきました。緩和ケアに関する講義だけでなく、グループワークの時間も設けられており、とても充実した2日間となりました。

グループワークでは、医療従事者と患者役に分かれてロールプレイを行いました。患者役になることで、医療従事者のちょっとした声掛けや笑顔で、こんなに気持ちが救われるということを経験することができました。と同時に、患者さんの苦痛はさまざまな要因がある中で、コミュニケーションの重要性を改めて感じました。また、日常業務で直接関われない、介護保険についても学ぶことができました。様々な職種が専門性を発揮し、患者さんやご家族を多角的にサポートして医療を提供していることを実感しました。

薬を扱うことが主となり、身体的な痛みを取ることにフォーカスが当たりがちですが、患者さんとコミュニケーションを通して不安なことやさまざまな思いを少しでも汲み取り、他の医療スタッフと情報を共有し、チーム医療の一員となれるよう今後も努めていきたいと思いました。このような研修会を開催して下さったスタッフの皆様に感謝申し上げます。

(文責：薬剤部 高城 沙也香)

今回緩和ケア研修会に参加させて頂きました。

普段の業務の中で緩和ケアという言葉はよく耳にし、これまでも研修会などに参加してきましたが、今回の研修では様々な立場の講師の方々からの講義を聴くだけでなく、多職種で事例検討を行ったり、ロールプレイをしたりすることで、これまで疑問に感じていたことが解決でき、また新たに多くの知識を得ることが出来ました。

研修の中で私が特に考えさせられたことは、「緩和ケアとは身体の苦痛を軽減するのは大前提であるが、それと同じように精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛に包括的に対応することが大切である。」ということです。これまで漠然とした理解でしたが、今回の研修でチームで行う緩和ケアがどんなに大切かを実感できました。チームにおけるMSWとしてのどのような苦痛にどのように対応できるかを意識して考え、患者さんを支援していきたいと思います。

最後になりましたが、このような充実した研修会の企画・運営に携わってくださった方々に感謝申し上げます。

(文責：MSW 久保 奈々)



平成29年度 脳卒中看護エキスパートナース研修を開催して

鹿児島医療センターでは、脳卒中の専門施設として脳卒中看護エキスパートナース研修を毎年開催しております。今年度も平成29年11月27日から12月1日までの5日間、院外9施設10名、院内3名の計13名の看護師が参加しました。

この研修は、脳卒中看護の質の向上を図るための知識・技術・態度を習得し、より専門性の高い看護実践ができる能力を育成する事を目的に行っています。17名の講師により、脳卒中の病態生理・診断及び治療、運動・認知障害とリハビリテーション、脳卒中フィジカルアセスメント、重篤化回避・再発予防のための健康管理、地域連携の推進などの講義や演習を行いました。今年度は、患者個々に応じた急性期から回復期における、一貫した自立支援が理解できるように当院の認定看護師を中心にプログラムを検討しました。そして、認知症患者・家族の看護の講義や、回復期病院の3名の脳卒中リハビリテーション看護認定看護師により専門的視点からの講義や演習を新たに追加し、脳卒中看護について系統的に学べるような内容にしました。

また、脳卒中病棟、SCU、ICUでは、救急外来から入院までの一連の流れなど、脳卒中の病態に沿った治療や、急性期にある患者のモニタリングと看護ケア、障害に応じたリハビリテーション、患者家族を取り巻くチーム医療や社会問題について理解を深めることができたのではないかと思います。

最終日の事例検討では、これまでの経験と今回の学びをもとにした、事例を通して看護を語る事で、脳卒中患者・家族の自立支援の重要性を学び、急性期・回復期・維持期それぞれに必要な看護や患者家族への支援の在り方、今後、転院時に継続した援助を提供するために必要な情報をディスカッションする場になりました。今後、脳卒中看護エキスパートナース研修生には、脳卒中患者の看護実践で役割モデルを示し、患者個々に応じた自立支援のために、他職種と協働しチーム医療においてリーダーシップを発揮されることを期待します。

私達は今後も多くの施設の方に参加していただけるよう、研修内容を充実させていくとともに、この研修を通して脳卒中地域連携における看護師間のネットワークの強化につなげていきたいと考えます。

(文責：東5階病棟 高木 幸子)



■お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター (循環器・脳卒中・がん専門施設)

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

(代)TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <http://www.kagomc.jp>

【地域連携】 蘭田・谷口・田上・吉永・迫田・中田・吉留・菊永・櫻木・田辺・前田

【がん相談】 松崎・森・水元・原田・上妻・久保・杉本

フリーダイヤルFAX専用▶0120(334)476

※休日・時間外は当直者で対応します。

